

Phoenix des Tropiques. Dakar: Association des
Amis du Musée Historique du Sénégal (Gorée).
太田好信. 1993. 「文化の客体化—観光をともし
た文化とアイデンティティの創造」『民族学研

究』57(4): 383–410.
親泊素子. 2012. 「Dark Tourism 試論『負の遺産
は観光資源になり得るか?』」『江戸川大学紀
要』22: 139–148.

イエティをめぐる複数の語り

石 内 良 季*

ブータンのイエティ譚

「あれはちょうど私が生まれてから干支
が2周した(24歳)くらいの頃、インドと
の国境につながる道路の建設をしていた時
さ.¹⁾ 道路を作るために集めていた水が雄の
イエティに毎晩飲み干されるもんだから、あ
る日代わりにアラ²⁾を入れておいたの。そ
れを飲み干して、酔いつぶれたイエティを私
たちは捕まえて、インドに連れていった。そ
れから2日後、木の根でできた抱っこ紐を
使ってソナムという名の赤ちゃんを抱えた雌
のイエティが建設現場にやってきて、“ソナ
ムのお父さんはどこ?”と叫んでいたよ。」

2020年1月某日、私はブータン王国(以
下ブータンと称す)東部タシガン県のある村
で、アビ³⁾(90代、女性)の話に耳を傾けて

いた。ブータンの土着信仰と自然観の關係に
ついて「聖なる森(sacred grove)」の調査を
進めていた私は、調査を始めて早々に新たな
森の住人の存在を知ることになった。そう、
イエティである。

一般にヒマラヤの雪男として知られる
イエティ⁴⁾は、ミゲ(*migoi*)やグレッドポ
(*gredpo*)、グレットム(*gretmu*)という名
でブータンでは知られている(筆者の調査地
ではグレットムが用いられていたが、本稿で
は広く一般に知られているイエティの呼称を
用いる)。ブータンのイエティ譚をいくつか
紐解くと、その大きさはおおよそヤク⁵⁾1.5~
2頭分であり、顔を除き全身を覆う体毛は赤
茶色から黒色、雌は大きな乳房を垂らし、標
高およそ3,500m~5,000mの間に生息、単

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 現在のアビの年齢と当時のブータンの道路開発状況(1961年より始まった第1次五ヵ年計画により施行)を考
えると、アビの示す年代には誤差があるように思える。

2) ブータンの家庭で作られる蒸留酒。

3) 現地語(シャルチョップ語)で“祖母、おばあさん”を意味する。

4) イエティという呼称は元々、ネパールのシェルパ族の言葉に由来し[Snellgrove 1995: 214]、それが西欧の探検
家やメディアを通して一般化したものである。

5) 体が長毛で覆われたウシ科の哺乳類。雄は体長3mを超えるものもある。

独あるいは夫婦で行動することがイエティの特徴とされている [Choden 1997: 10–11].

Deity or Yeti?

アビの話は続く.

「イエティとミルゴン (*milgon*),⁶⁾ そして虎. この3種類は重要な動物よ. とても危険だからね。」

一般に仏教国として知られるブータンではあるが, ブータン各地には山や湖, 大木といった自然物に靈魂を見出し, 仏教伝来以前から存在する土着信仰の姿が多くみられる. 私が対象とする「聖なる森」もまた, 土着信仰にルーツをもち, 土地神 (Deity) の住まう神聖な土地として周辺住民に知られている森である. そして, 筆者の調査地には, フラン・フラン・マ (*Phrang Phrang Ma*) と呼ばれる土地神の依り代^{よりしろ}である崖を中心とした「聖なる森」があり, イエティが存在するとされている (写真1).

アビはイエティを「重要な動物」と説明した. しかし, 筆者はここである問題に直面する. 果たして, イエティは土地神が姿を変えて現前した化身なのか, それともただの動物なのか, それとも他の存在なのか?

調査地で話を聞いた村の高僧 (60代, 男性) は, 「聖なる森」の内部に建てられた小屋で修行をしていた際, イエティを目撃した. 彼は言う. 「イエティはフラン・フラン・



写真1 イエティが住まうとされる「聖なる森」

マの化身であり, 仏教の守護者である」と. また, 農家のTN氏 (60代, 男性) によれば, イエティは「フラン・フラン・マの家畜のようなもの」であり, ただの動物であるとし, その一方で, ボンポ (*Bonpo*) と呼ばれる村の宗教的職能者であるR氏 (50代, 男性) は, イエティは「動物でもなく, フラン・フラン・マでもない」と答える.

ヒマラヤ地域で目撃されたイエティ譚を根拠にイエティを, ①仏教修行者, ②人間にとっての宗教的協力者, ③友好的なイエティ, そして④山神の4つに分類するCapper [2012] に従えば, 高僧の語るイエティ像は④に相似する. 「仏教の守護神」という属性が, グル・リンポチェ⁷⁾ によって調伏^{ちょうふく}され, 仏教神格化された土地神に付随すると考えればさらに納得がいくだろう. しかしイエティが動物であるとするTN氏の語りや, 動物でも土地神でもないとするR氏の

6) 体長は1 m 程, 顔を除き全身を覆う体毛は茶褐色, 長い前髪と手をもち, 2,500 m 以上の深い森に棲み, 人間の物まねに長けていることが特徴とされる二足歩行をする生物. しばしばイエティと混同される存在である. ミルゴンについては稿を改めて論じたい.

7) ブータンに仏教をもたらしたとされる高僧. チベット仏教ニンマ派の開祖であり, ブータンを含むヒマラヤ地域で多くの土地神を調伏した存在として知られる.

語りに出てくるイエティはこの分類に当てはめることができない。イエティが友好的であれば、動物としてのイエティは③の区分に当てはまるだろうが、TN 氏の語りの詳細がこれを否定するだろう。TN 氏は、プー・ダニ (*phu dani* : “山猫”) と呼ばれるネズミ退治を得意とする森の生き物を呼ぶ儀礼において、その飼主であるフラン・フラン・マにプー・ダニを送ってもらうお願いをする必要があると語った。ある日、ひとりの男がプー・ダニの助けを借りたく、フラン・フラン・マにお願いしたが、間違えてプー・メメ (*phu meme* : “山爺さん”) と発話してしまい、翌日、男のところにプー・ダニではなく虎が来て、作物を台無しにされたという。この話を聞いた筆者は TN 氏に「虎が送れるなら、イエティも送れますか?」と聞くと、TN 氏は答えた。

「もちろん送れるさ。でも、一体誰がイエティなんか呼びたいんだ!」

イエティはどこへ行ったのか

アビの話は続く。

「人々はダイナマイトを用いて山を削り、道路を作っていたもんだから、イエティもミルゴンもたくさん死んださ。生き残ったものは高く、深い山奥に逃げていったよ。」

「なぜ人々はイエティを見なくなったのか? (Why don't people see the yeti any more?)」

と題された BBC [2015] の記事では、車道の開通によるモノの流入や、電気・ガスの利用ができるようになったことによる生活の変化が、イエティと遭遇する機会の減少につながっているとしている。では一体、イエティはどこへ行ったのだろうか?

N 氏 (70 代, 男性) は彼が 15~16 歳の頃、イエティの鳴き声をよく聞いたという。イエティはよく村の近くに来て、大きな木があるところに住みついていたと、筆者が滞在していた家のアジャン⁸⁾ (40 代, 男性) は、イエティは至るところに以前はいたが、村の人間が増えたために、大きな山や森に逃げていったという。

T 氏 (60 代, 男性) の語りはこうだ。ある日、Y 地区と D 地区⁹⁾ の力持ち (*mangsan*) が巨石を投げる力比べをした。この勝負に勝った D 地区の力持ちは、Y 地区のイエティとミルゴンを D 地区に連れていったため、それ以降この付近でイエティとミルゴンを見かけることはなくなったという。¹⁰⁾ 一方で、在家僧の Y 氏はこう語る。「以前は多くの人イエティもミルゴンも見た。今はそうでない。グル・リンポチェが彼らを調伏したからだ」と。

果たして、人々がイエティに出会わなくなったのは、人々が森や山に行かなくなったからか? イエティが深い森や高い山に移動したからか? ダイナマイトで個体数が減少した

8) 現地語で“伯父”を意味する。

9) 筆者の調査地である村は U 地区に属し、Y 地区と同じ山の斜面に位置する。対して、D 地区は河川を挟んだ対岸側に位置するため、U 地区からもイエティとミルゴンが姿を消したとされている。

10) 同地区の伝承を収集した Pommaret [2004: 52] は、力持ちではなく、両地区の土地神が投石による力比べをしたと報告しており、勝った D 地区の土地神は、Y 地区の牛を含めた富を手に入れたとしている。

からか？グル・リンポチェによって調伏されたからか？それとも、彼らの世界からイエティがいなくなりつつあるからか？

筆者の滞在した村も含めて、ブータン村落地域の近代化に伴う影響は計り知れない。若者の農業離れ、寄宿制度による村の人手不足、農村地域の過疎化、空き家の増加、車道の開通、そして、世代間の伝統知識の格差の拡大。イエティ民話の伝承もまた、近代化の渦中にある。ある日、村でイエティに関する聞き込みを行っていた時、イエティの様相を知りたく、手持ちのスマートフォンのGoogleで「ゴリラ」と検索し出てきた写真を見せたら、「そう！これがイエティ！インドの動物園に行けば見れるよ！」と言われた。イエティは「聖なる森」に“かつてはいた”存在であり、今はインドの動物園の大きな檻の中にいる存在になりつつあるのかもしれない（写真2）。

イエティをめぐるのは、その特徴や属性、どこへ行ったかを含めて複数の異なる語りが見られることが分かっただろう。もっとも、筆者はイエティがいるか、いないかという話をしたいわけではない。むしろ、筆者は村人にとってイエティやミルゴン、土地神がどういった存在であり、彼らを通して自然とどのように関わってきたか／いるかに関心がある。イエティやミルゴン、土地神をめぐるブータンの王室や政府、仏教僧、村人といった異なるアクターが生成する複数の異なる語りとその構築過程に着目して、ブータンの土

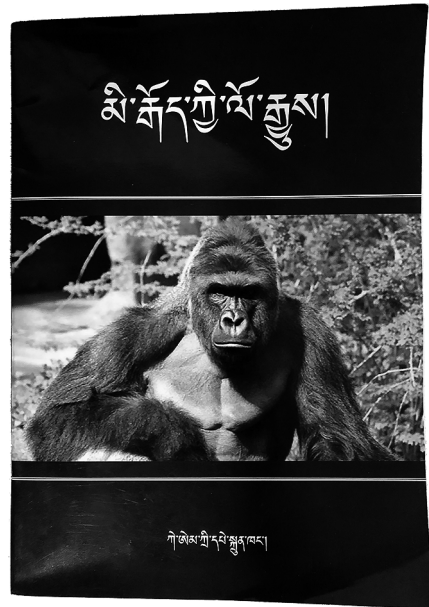


写真2 『イエティの物語 (mirgod kyi lo rgyus)』と題された本

着信仰と自然観の関係について今後も研究を続けていきたい。

引用文献

- BBC. 2015. 〈<https://www.bbc.com/news/magazine-34448314>〉 (2020年5月26日)
- Capper, D. 2012. The Friendly Yeti, *Journal for the Study of Religion, Nature, and Culture* 6(1): 71-87.
- Choden, K. 1997. *Bhutanese Tales of the Yeti*. Bangkok: White Lotus.
- Pommaret, F. 2004. Yul and Yul Lha: The Territory and Its Deity in Bhutan, *Bulletin of Tibetology* 40(1): 39-67.
- Snellgrove, D. L. 1995. *Buddhist Himalaya*. Kathmandu: Himalayan Book Sellers.